



## Lily's Market

### 若き競り人として 「血の通った公正な取引」

私は、東京都中央卸売市場初の花き部を開場した北足立市場内の(株)第一花きに勤めて約20年になります。もともと自然が好きで農家に憧れていましたが、先輩から「市場は熱い世界だ」と聞かされ市場に興味を持ちました。

初めて活気ある競りを目の当たりにした時の感動は今も忘れられません。日本全国から新鮮な切り花が届けられ、毎日が運動会のような熱気。大人たちが一生懸命「良いものは良い」と、目利きにプライドを持って仕事をするまっすぐな情熱も、とても新鮮でした。

第一花きは、人と人が直接やりとりをする血の通った手競りを今も大事にしています。私自身、手競りは効率的な機械競りと違う「公平な取引」ができると感じています。厳しい相場を支えてくれた買参人との信頼関係を築くには、競り場でつくる空気がとても重要となってきます。生産者と買参人の橋渡しをするやりがいのある仕事なので、次の世代の競り人たちも手競りに挑戦できるよう環境を整えていきたいですね。

取材協力: (株)第一花き 由本 晃赦さん



Lily's Seasons

### 惜しまぬ手間ひま 「テッポウユリは島の宝」

日本でユリの球根を作っているのをご存知ですか?現在、日本で流通するユリ切り花のほとんどがオランダ産の球根を使って栽培されていますが、ここ沖永良部島では1899年からテッポウユリの球根生産を続けています。

ところで、ユリを漢字で書くと「百合」ですが、その由来は実は球根。ユリの球根(ユリ根)はいくつもの鱗片から成っていますが、数の多さを“百”と表現し、百の鱗片が合わさるから「百合」なのです。球根生産では、このたくさんの鱗片を全て剥いたものを植え、健全な苗だけを選別し、植え替えなどをしながら2年の歳月をかけて出荷できる球根にまで育てます。

そうして手間ひまを惜まず作られる島の球根生産量は年々減り、作り手の高齢化も進んでいます。永良部ユリは島の宝です。私は島で祖父の代から続く畑を継いでいますが、大阪の花市場や福岡の花屋での仕事もしてきました。流通から販売、他の生産現場など花業界全体を見てきた経験を活かし、新しい風を持ち込んで島の宝を守っていきます。

取材協力: 沖永良部花き専門農業協同組合 東農園 東 寿光さん

### 「三茶でユリを買うならオランダ屋」 幸せをくれるユリ



Lily's Life

「三茶でユリを買うならオランダ屋」と言われるお店を目指して、オランダ屋三軒茶屋店では普段から5~6品種のユリを置いていますが、フェアではさらに増やして30品種以上のユリを並べています。

私が花好きになったのは、完全無農薬の畑をやっていた父の影響です。大人になってからも、よく父と連れ立ってお花のイベントに行きました。初めて花屋で買ったお花は、甘い香りと純白の花弁に一目惚れしたオリエンタルユリのシベリア。その後、花の世界にのめり込んでいったのも、そのシベリアを買った花屋でバイトをしてからなのです。父の影響で植物を知り、お花に触れ、ユリに誘われて花の世界にのめり込み、今なおその魅力に取り憑かれています。

私は自宅にユリを飾り続けて27年になりますが、お家にユリがあるととても幸せな気持ちになります。朝は蕾だったユリが、帰宅時には玄関で綻んだ甘い香りで私を迎えてくれます。そんな変化が愛おしくて、私は今日もお客様に幸せをくれるユリを届けるのです。

取材協力: (株)ブルーミスト オランダ屋 大森 智保さん

